日英語における〈見え〉の表現

北林　利治

1. はじめに

出来事や事物を描写することは、視覚によって得られた情報を使うことが主となるので、話し手が〈見え〉をどう表現するかという問題に深く関わる。問題の糸口として、Uehara（1998: 287）による、オー・ヘンリー（O. Henry）の「最後の一葉」（“The Last Leaf”）の英語の原文と日本語訳の対照分析を見てみよう。

(1) a. When Sue awoke from an hour's sleep the next morning, she found Johnsy with dull wide-open eyes staring at the drawn green shade.

b. 翌朝、スーが一時間ほど眠ってから目を覚ますと、ジョンシーは生気のない目を大きく見開いて、降ろされている緑色のシェードをじっと見つめていた。

この日本語訳は、「～と、～していた」という文で、スーの〈見え〉が語られている。一方、原文の英語では、Sueにとっての〈見え〉を She［Sue］found ... で表していて、視覚の主体が明示されている。もし、日本語訳を再び、英語に翻訳すると、次のようになる。

(2) Next morning, when Sue awoke from an hour's sleep, Johnsy was staring at the drawn green shade with dull wide-open eyes.

この英文では、語り手がSueの行動とJohnsyの行動の時間的順序を述べている文になってしまう（Uehara 1998: 287）。つまり、英語においては、知覚者なしに表現すると、出来事を述べただけの文になり、知覚者の〈見え〉を語ったことにはならないというわけである。

事物の描写表現においては、見る人（知覚者）と語り手を区別することが重要である。たとえば、語り手は、自分が見たものを語る際、〈見え〉として報告するのではないスタイルをとることも可能である。たとえば、上の（2）のように単に出来事の時間的関係を述べる表現方法もある。当小論では、紀行文などのノンフィクションにおいて、語り手が自分の〈見え〉をどのように表現しているかを、英語と日本語を対比的に考察していき、それぞれの言語における〈見え〉の表現の特徴を浮き彫りにしたい。

2. 〈視座〉と〈注視点〉が限定する〈見え〉

2.1 〈見え〉の表現と探索表現

〈見え〉を表現するためには、知覚者がどの地点から、どの方向を見て、そのように見えたのかを示す必要がある。〈見え〉は、見る人の位置（すなわち〈視座〉）と、見る人の見る方向（すなわち〈注視点〉）が提示されてはじめて表現され

る。このようにして話し手が描写した〈見え〉は、聞き手に生き生きとした〈見え〉を共有することを誘い、描写表現としていわゆる支配的な印象（dominant impression）を聞き手に与える。

話し手が聞き手に自分の〈見え〉を表現するという言語活動は、探索表現のひとつとして解釈することができる。われわれは何かをターゲット（T: target）として探索する場合、そのターゲットに到達するために、手がかりとしての参照点（R: reference point）を認知して、それを手がかりにして、当該のターゲットを探索していくことがよくある。ターゲットに注意を向けさせたいが、直接のアクセスが難しい場合、まず、注意を向けやすい参照点にアクセスし、参照点を介して、最終的にターゲットに注意を向けさせるという認知の方略である。〈見え〉の表現に即していえば、探している何か（話し手の立場からいえば、〈見え〉として聞き手に伝えたい事物や出来事）としてのターゲットに到達するための手掛かり（参照点）を提示し、それを起点にして、ターゲットを表現していく。例は、山梨（2004: 52）からである。

(3) I see before me a window; beyond that some trees ... ; beyond that the Atlantic Ocean; ...

上のような表現は、連続的に主体の視線の移動が起こっていて、視覚的スキャニングが起こっている連鎖的な探索の認知プロセスであるといえる。上で示したような、認知主体（C: conceptualizer）の居場所（〈視座〉）である参照点を設定して、その視座からどんな〈見え〉がターゲットとして見えるのかという図式として、参照点とターゲットの連続性は、図1のように示すことができる。これは、ある場所にいる認知主体がターゲットを得るために、参照点に最初にアクセスし、その周辺の領域であるドミニオン（D: dominion）の中にターゲットを求めるということになる。

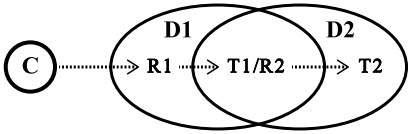

図 1

（山梨 2004: 52を参考）

このような連続型の例は、語り手自身が経験した〈見え〉を体験的に語っている場合として、日英語の言語表現に容易に見出すことができる。

もうひとつは、入れ子式の探索表現といわれるものである。このような表現は、〈注視点〉を与えることによって、話し手として聞き手に、視野の枠を設定し、その中に存在するターゲットとしての〈見え〉に聞き手を誘うという表現構造となる。

(4) ブリーグという街に近づくと、列車は谷底にある平地の線路を走る。山の方を見ると、岩肌の露出したいかにもスイス然とした風景が見える。谷底のはるか上空、その山の中腹を、よ～～～～～く見ると、何か赤いものが動いている...？！赤い電車である。脱線したら数百メートルは真っ逆さまという断崖絶壁を走る電車。（http://www.osaka-sandai.ac.jp/ce/rt/column/rail200710.html）

上の例では、知覚者である語り手は谷底におり、まず、山の方を見上げて、（〈注視

点①〉）そして、上空を眺めたときに見える山の中腹に目をやる（〈注視点②〉）。すると、「何か赤いものが動いている」（〈見え〉）というわけである。この場合、山の方向の中に山の中腹があり、その中に赤い電車が走ってので、この参照点構造は「入れ子式」ということになる。

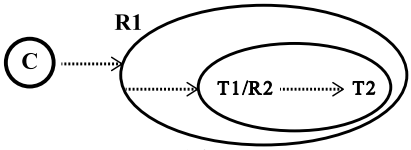

図 2

（山梨　2004: 53を参考）

以上、参照点構造を用いた探索表現と〈見え〉の表現の合一性を検討してきたが、〈見え〉を伴う生き生きとした描写表現というのは、取りも直さず、知覚者（見る人）の居所（vantage point）を明示し（〈視座〉）、その人が自分の視野（field of vision）の中のどこに注目し（locus of attention）、そしてそれを描写表現の舞台（onstage region）にする（〈注視点〉）のかに深い関わりがあることがわかる（Langacker 2000: 204-205）。

参照点構造を用いた探索活動としての提示の仕方は、話し手がどのような筋道を辿ってあるものや事態を見たのかということを聞き手に丁寧に示し、聞き手にもその道程を辿ってもらうことによって、聞き手に〈見え〉を追体験させようとする言語表現である。そのためには、〈見え〉を得た語り手がどこから見えを得たのか（〈視座〉）、また、〈見え〉を得るために、どこに視線を向け、どのような視野のうちに〈見え〉を得たのか（〈注視点〉）を明確にする必要がある。話し手が聞き手に、自らの〈見え〉を追体験させるには、まさに、聞き手にその状況を探索させて、首尾よく同じ〈見え〉を得させることが表現上重要だからである。

2.2 日英比較

以上のことを、英語と日本語を対比的に検討して例証してみよう。まず、「～すると、～が見えた」というパタンでは、話し手の動作を表している「～すると」の部分には〈視座〉がくると考えられる。つまり、〈視座〉を明示的に表すことによって、話し手の〈見え〉を表現しているパタンである[1)]。

(5) a. この車両は片側三つ扉なんですが、いちばん後ろのドアから僕が中に入ると、六五歳くらいの男の人が床にごろっと倒れているのが<u>見えました</u>。［イ］p. 183

b. I entered the third car from the front through the farthest back of the three doors and <u>saw</u> a sixty-five-year-old man sprawled on the floor.［ロ］p. 79

上の例では、「いちばん後ろのドアから中に入ると」とあるから、「ドアから入った」位置が〈視座〉になる。この例では、日本語でも英語でも同様の表現で、〈見え〉が示されている。

もう少し詳細に日本語と英語を対比させてみれば、英語では、必ずしも、〈視座〉や〈注視点〉が明示されないケースが多いことに気づく。たとえば、

(6) a. <u>顔を見ると</u>高橋さんは苦しそうで、とてもしゃべれる状態ではありませんでした。［イ］pp. 56-57

b. Takahashi's face looked awful. He couldn't talk.［ロ］p. 21

(7) a. 外を見ると、到着したばかりのひとたちが、雨を逃れるため、屋根のあるアーケードの方に走っていく。［ニ］p. 8

b. Outside the station the rain drove new arrivals toward the shelter of the covered arcades. ［ハ］p. 4

のそれぞれの例において、(6) では、「顔をみると」と〈注視点〉が示されているが、英語ではそのような構造になっていない。(7) は、語り手は駅前の喫茶店におり、そこから外を眺めているという場面である。日本語訳では「外を見ると、……」というように、描写される場面において語り手が「外を見た」という表現が用いられ、知覚者である話し手が位置づけられているが、英語の原文ではこのような表現にはなっていない。

以上のように、日本語の場合は、語り手の〈見え〉として表現されていても、英語では、〈見え〉としてではなく、一連の出来事（events）として表現されるという対照はしばしば見受けられる。

3. 転位における知覚者と話し手

語り手が臨場で見ている対象や事態を描写する場合、語り手と知覚者が一体化しているといえようが、過去の自らの知覚経験を語ったり、書いたりする場合、時間的・空間的に転位（displacement）が起こっている（Chafe 1994: 32）。そのとき、実際に見る人（知覚者）とそれを語る人（話し手）の関係はどのように捉えればよいのだろうか。観察者として得た〈見え〉を、話し手（語り手）は、どういったスタンスで読み手や聞き手に、語ったり、書いたりするのかという点に注目してみたい。ここでの日・英語の何よりの対照点は、「見る人」と「語る人」を区別した場合に、語り手が描写の現場まで移動して、描写をより直接的に行っているという表現方法を採るか（日本語の表現モード）採らないか（英語の表現モード）という対立である。

前のセクションで、例文（5.a）と（5.b）を検討したが、この「～すると、～が見えました」というパタンでは、日本語でも英語でも、〈視座〉が明示されて、そこからの〈見え〉が「～が見えました」とかI could see ... という表現で表されているという点は日・英語とも同様である。

しかし、次の例では、日本語では、「見える」に対応する表現が見当たらない。

(8) a. 電車に乗り込むと、二人の駅員さんが僕の目の前で床を拭いていました。［イ］p. 101

b. The bell was ringing when I reached the Chiyoda Line platform, so I raced to get on, but the train just sat there. I saw two station attendants wiping the floor in front of me. ［ロ］p. 46

これらの対比から分かるように、日本語で「～と、～だった」の表現で知覚者が明示されていなくても、英訳は、動詞seeが用いられ、知覚者が明示的に現れているものがほとんどである。そして、この「～と、～だった」の構文の特徴は、2番目の節は、1番目の節の自然な結果を表している点にある。つまり、「～と」で示される行動は、2番目で示される話し手の〈見え〉の条件になっているわけである。

日本語では、描写の表現において、このような「～と、～だった」という表現は

広範囲に用いられていて、少し変形させたパタンである「～を見ると、～だった」というパタンもある。

(9) a. なんだろうと思って、私もそっちの方を振り向いて見ると、そこにノートくらいの大きさのものが置いてあったんです。［イ］p. 296

b. I turned around to look and saw something about the size of a notebook lying at the feet of the second person on my right.［ロ］p. 122

ここでは、〈注視点〉が「～を見ると」の目的語で示され、次いで、語り手にとっての〈見え〉が直接描写されるという表現になっている。一方、英語の訳は、これまでのパタンと同様に、look＋seeの表現形式が用いられている。このように、〈見え〉の日本語表現において「～と、～だった」の表現が用いられ、知覚者が登場しない場合、英語においてはいずれも動詞seeが用いられ、視覚の主体である語り手Iが明示的に表出される。

これらの問題は、語り手が自分に見えたものを語る様式が客観的か主観的かという観点から捉え直すこともできる。大薗（2006: 524）は、「言語の話し手は、ある事態を言語化する際に、一方では事態の中に自らを置くというやり方で（主観的に）、他方では事態の外に自らを置くというやり方で（客観的に）その視座を定めることができる」と述べているが、一般に日本語は英語にくらべて主観的な事態把握が優勢であるといえよう。

いいかえれば、語り手が描写の現場の世界に移動して、直接知覚するという想定のもとに事態が語られる表現のモードである。日本語では、物語文だけではなく、随筆や通常の報告文、紀行文などでも頻繁にみられる表現のモードである（山岡 2012）。語り手が、語られる対象の現場に移動して、その事態の中に自らの身をおいて、目のあたりにしている対象物、出来事、状況を語り手として語っている表現モードである。一方、英語では、知覚している語り手自身がI sawという表現で表されていて、語り手が〈見え〉を得ている自分自身を、語っている時点から表現しているモードである。日本語には、語り手を事態が起こった現場に引き戻すやり方がいろいろとあるが、いま上の例で検討した「～と、～だ」という表現は、〈見え〉をいわば直接的に表現する方略のひとつであるといえる[2)]。

以上、日本語において「見える」などの視覚を表す動詞が用いられずに、知覚者が、いわば直接に自身の〈見え〉を表している表現形式を検討した。一方、英語では、このような場合、認識主体が明示的に表現され、視覚によって得られた情報であるということを明示的に表す傾向があるということを考察してきた。「～と、～だ」という構文は、〈視座〉に知覚者が立ったとき、どんな〈見え〉が得られるのか、あるいは、〈注視点〉に知覚者が視線を向けたとき、どんな〈見え〉が得られるのか、を因果関係の枠組みの上に立って示した表現形式であるといえる。〈見え〉の描写表現として日本語で多用されるこの形式は、〈注視点〉と〈視座〉を構文の中に明示しているということに加え、語り手が描写対象の現場に移動して語るという形式の構文であるといえる。この構文では、話し手が揺曳し、話し手と知覚者

との合一化が起こっている。一方、英語においては、知覚者と話し手が乖離していると結論づけることができよう。

4. 英語における臨場の〈見え〉の表現

4.1 知覚者と知覚対象の反転

前のセクションでは、日本語と英語の〈見え〉の表現モードの違いを述べたが、英語において、日本語風に話し手の臨場での〈見え〉を直接的に表現する方法はないのだろうか。ここでは、その可能性として2つをとりあげたい。いずれも、視覚の主体である認識者が表現上明示的に現れないという点において、日本語の現場の〈見え〉の表現と並行的である。

視覚表現を検討すると、視覚者から対象に向かう動きと、逆に対象が視覚者の中（視界）に入ってくるという動きの表現がある。Russian police car was approachingというような表現は、視界の中に入ってきたという表現であるから、I can see ... のように、認知の主体から対象物への視線が到達するということではなく、知覚の対象からの視覚の刺激が知覚者に到達するという意味において、「反転」が起こっている（山梨 2009: 91）。

この反転表現は、現場における〈見え〉を表すのに格好の構文だといえる。たとえば、さきのRussian police car was approachingの例は、投稿動画（http://www.youtube.com/watch?v=UN2Uw4mIYEk）のキャプションで、投稿者の車の前面に取り付けられたカメラで、対向車線を向こうから走ってくるパトカーを撮影している映像が映っている。まさに、語り手の〈見え〉を臨場的に表している英語の表現であるといえよう。

この種類の表現は、日本語の臨場における視覚表現に近いといえる。対象物が認識者に入り込んでくるという表現は、認識者からの働きかけではなく、知覚者がある状況に立たされた場合、否応無しに起こった出来事であるということをより顕著に表現することができる表現形式であるといえる。

4.2 懸垂分詞構文

懸垂分詞構文も語り手の現場における〈見え〉の表現と同じような表現効果を出すのに一役買っている。懸垂分詞構文は、分詞の意味上の主語と主文の主語が一致しないにもかかわらず、分詞の意味上の主語が顕在化していない構文であり、一般に英文法において、破格構文であると考えられている。早瀬（2007: 81）は、懸垂分詞における「主観的」視点を論じている。

(10) Entering the monastery, the ticket office is on the left and is one of the few places in Prague where good guide books can be bought.

上の例に即していえば、主節の主語はthe ticket officeであるが、分詞句の意味上の主語は、「修道院に入っていく人」となる。この例は、懸垂分詞構文を用いて、修道院に入っていくという実際に歩いて入っていく移動を行ったときの話し手にとっての〈見え〉を表現しているといえる。知覚者が移動していくと、ある光景が知覚者の視界に入ってくる、ということを表現している。その意味で懸垂分詞

構文は、日本語で、語り手が描写の現場で見た〈見え〉を表現するのと同じような表現効果があるといえる。

懸垂分詞構文は英文法書でも文法的な誤りの例として採り上げられることが多い。つまり、英語では、基本的な描写のパタンとして状況を外部から見て表現する傾向があるという点において日本語と鋭い対照を窺うことができる。

5. 描写における話し手の感想の挿入

5.1 感想の差し挟みの表現構造

日本語の描写表現には、視覚で得られた描写の中に、話し手が描写の現場に自らを投影し、その場で話し手自身が得た感想を臨場的に述べている表現をしばしば見出すことができる。

(11) 工事をしている十八神社の境内に入ってみると、こじんまりした境内は、コウヤマキの枯れ葉で埋め尽くされていた。ご夫婦だろうか、男性と女性が、掃除をしていた。

（『やまとびと』、2012年 Vol. 59）

上の例では、神社の境内において男性と女性が掃除をしている場面の描写があり、〈見え〉の中の「男性と女性」という一部分を語り手が「ご夫婦」と判断して、描写の中に、話し手のコメントとして挟み込まれている。

このような表現構造はどのような過程で生まれてくるのだろうか。Lakoff (1995) は、視覚表現は知覚者と対象物の物理的な触覚経験に基づくメタファー（PERCEPTION IS CONTACT BETWEEN PERCEIVER AND PERCEIVED）として捉えることができるということを示したが、物理的空間における移動のプロセスである〈出発点〉から〈到達点〉へのメタファーである視覚表現への比喩的表現が一方にあり、他方で、概念の空間における推論のプロセスとして〈前提〉から〈結論〉への比喩的な転換の表現があると考えることは自然な文法的分析であるといえる。次のような英文は、以上の事情を例証している。

(12) From my office, I can see the bay.
（Lakoff 1995: 133-134）

(13) From her explanation, we came to the conclusion that she is not guilty. （山梨 2012：83）

出発点から到達点の動作のスキーマが元となり、それぞれのメタファー的展開を次のように考えることができる。

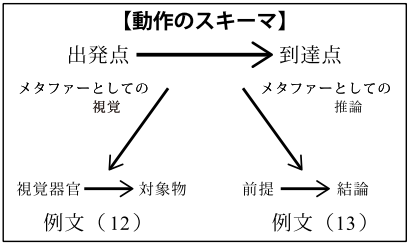

図 3

以上の考察からすれば、〈視座〉や〈注視点〉を参照点として示し、ターゲットとして〈見え〉を表すというこれまで検討してきた臨場における視覚表現と、〈視座〉や〈注視点〉に並行するものとして〈前提〉を提示し、そこから導きだされる〈結論〉が認識者の臨場におけるコメントや感想である、という並行性はじゅうぶん納得できよう。このような判断のプロセスを反映した表現構造は、話し手が描写の現場でその判断を行っているという発話の臨場性が要諦であり、〈見え〉の知覚

者として描写の現場に身を置いている語り手が、その現場に立ったとき〈見え〉を得たのと並行する形で、臨場にあって、あることが前提となってある種の結論である語り手としての判断や感想を得た、という認知プロセスを表現した形式が、描写の表現に組み込まれたものであると解釈することができる。

そうだとすれば、語り手が〈見え〉の現場に移動することなしに、知覚者を明示的に表現する傾向の強い英語の描写表現においては、描写表現の中に、話し手の感想や判断が組み込まれることが少ないのではないか、という推論が成り立つ。

5.2 感想の差し挟みの英語表現

日本語の感想やコメントの差し挟みに対応する英語表現にはいくつかのパタンがある。次の例では、日本語で判断の形式として「〜と見えて」と表現されているものが、英語では事実として客観的に表現されている。

(14) a. 四時、平館の村に行き着いた。葬式が終ったところと見えて、この村唯一の本通りには、……黒衣の年金生活者が散らばっていた。［ニ］p. 27

b. At four I reached the village of Tairadate. A funeral had just ended and the single main street of the village was littered with black-clad pensioners . . . .［ハ］p. 16

ここでは、書き手が実際に見ているものは、年金生活者が三々五々歩いている姿であり、この風景を見て、語り手は「葬式が終わったところだ」と判断としてコメントとしている。英語の原文では、語り手は葬式が終わったところであるという確たる証拠があるのかどうかは別にしても、葬儀が終わったということを客観的に描いている。日本語においては、話し手が聞き手に語る場合、これは話し手としての判断や感想だということを明確に示す言語であるのに対して、英語では、描写の現場では話し手が判断したことかもしれないが、ある程度証拠がある場合には、それを事実として扱ってしまう傾向がある。

次の例では、日本語においては、語り手は、描写されている場に観察者として身をおいて、見た臨場において心に抱いた感想を述べているという形になっていて、「花びらへの執着が強いようで、……散らせるのもいやいや、といった風情だ」と、話し手にとって光景が現前しているような様態で描写がなされている。

(15) a. それを背景に並んでいる鉄塔の列が、野生のサクラの木の上にそびえ立っている。サクラも、はるか北のこの地では花びらへの執着が強いようで、ふんだんに咲く南の木々に比べると散らせるのもいやいや、といった風情だ。［ニ］p. 66

b. The hills were still the new green of spring, not the heavy, brazen green of summer, and across them marched ranks of iron pylons, towering above the wild cherry trees that, here in the far north, seemed to cling more tenaciously to their petals and release them more grudgingly

than the trees of the opulent south. ［ハ］p. 35

英語の原文を見ると、the wild cherry treesにthat節が修飾しているという構造になっていて、名詞句を修飾するような表現形式になっている。

このパタンには少し変形したパタンもある。名詞を修飾する構造になっているという点では、上の（15. b）のパタンと同じだが、それが、定形文としての構造をなしておらず、非定形の動詞形式が用いられているという点に特徴がある。

（16）a. all ［=all the gulls］ facing seaward from where the storm was blowing, preferring the devil they knew. ［ハ］p. 27

b. みんな［＝カモメ］風の吹いてくる海の方向に頭を向けている。正体の知れている災いの方がまだしもましというわけだ。［ニ］p. 53

上の日本語訳では、下線部分は語り手のコメントの挿入であるように自然な日本語として訳されているが、原文の英語では、日本語の語り手の感想や判断に当たる部分が、そのまま、「カモメ」を修飾するような表現構造になっている。このように、名詞句をそのまま提示する構文は主述の構造が明示されていない、という点において、明らかに破格の構文だが、そのような構文が英語では使われているという点こそが、このような表現形式が例外的であるということを窺わせる[3)]。

見る人と語る人が一体化される日本語風の描写表現では、しばしば、臨場で浮かんだ語り手の感想が描写の中に挟み込まれているのに対して、英語では、先に述べたように、見ている人と語り手が区別され、語り手が臨場しない表現方法が多いとすれば、このような〈見え〉の描写の中に感想を組み込む表現があまり見られないことは自然なことである。

6. むすび

当小論では、①〈視座〉と〈注視点〉を語り手が提示し、話し手にどのように見えたのかを明示するとき〈見え〉の描写が可能になり、生き生きとした臨場感溢れる描写表現になるということ、②日本語では、見る人と語り手が一致し、語り手が視覚表現の現場にいわば移動する傾向があるのに対して、英語ではそのようなことが、一部の修辞的・破格構文を除いて起こらないこと、そして、これは語り手が、語っている時点から事態を表現しているのか、それとも、語りの現場に移動して表現しているのか、という両言語の表現のモードの違いに起因しているということ、③加えて、日本語に特徴的な〈見え〉の表現の中に感想や判断を挟み込む表現形式は、②から、英語にはあまり見られない形式であるということに自然な説明がつくことを述べ、全体として、日本語と英語の〈見え〉の描写の特徴を対照的に捉えることを試みた。

注

1 引用作品は、村上春樹『アンダーグラウンド』［イ］、Alfred Birnbaum and Philip Gabrielによる英訳 *Underground*［ロ］、Alan Booth, *Looking for the Lost*［ハ］、柴田京子による日本語訳『津軽―失われゆく風景を探して』［ニ］である。

2 日本語では、知覚者が明示されずに「見える」が用いられている場合は、語り手が知覚者と一体化するわけでもなく、完全に外側に置かれるわけでもないので、澤（2004: 92）は「中間的情況描写」とよんでいる。

3 一般にing形を使っている非定形構文には、臨場の〈見え〉を表す機能があるといえる。たとえば、「名詞句＋分詞」で主語と述語の形式を伴っていない非定形の表現形式は、ニュースなどで、現場中継のときの表現にも見られる。

参考文献

Chafe, W. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing.* Chicago: The University of Chicago Press.

早瀬尚子. 2007.「英語懸垂分詞における『主観的』視点」河上誓作・谷口一美（編）『ことばと視点』77-90. 東京：英宝社.

金慶珠. 2008.『場面描写と視点：日韓両言語の談話構成とその習得』神奈川：東海大学出版会.

北林利治. 2011.『文法における話し手の様相』東京：英宝社.

Lakoff, G. 1995. “Reflections on Metaphor and Grammar.” In M. Shibatani and S. Thompson（eds.）. *Essays in Semantics and Pragmatics.* Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, R. W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* New York: Oxford University Press.

Langacker, R. W. 2013. *Essentials of Cognitive Grammar.* New York: Oxford University Press.

松木正恵. 1992.「『見ること』と文法研究」『日本語学』11（9）, 57-71.

大薗正彦. 2006.「ドイツ語における主観性の諸相」『日本認知言語学会論文集』6, 524-527.

澤泰人. 2004.「物語文における視覚による情況描写の連続的展開に関する認知言語学的分析」『宇部工業高等専門学校研究報告』50, 91-95.

Uehara, S. 1998. “Pronoun Drop and Perspective in Japanese.” In N. Akatsuka, H. Hoji, S. Iwasaki, S-O. Sohn, and S. Strauss（eds.）. *Japanese/Korean Linguistics* Vol. 7. Stanford: CSLI Publications.

山岡實. 2005.『分詞句の談話分析：意識の表現技法としての考察』東京：英宝社.

山岡實. 2012.『文学と言語学のはざまで―日英語物語の言語表現分析』東京：開拓社.

山梨正明. 2004.『ことばの認知空間』東京：開拓社.

山梨正明. 2009.『認知構文論―文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店.

山梨正明. 2012.『認知意味論研究』東京：研究社.

（京都橘大学）